

「建学の精神と西南学院中・高の飛躍」

伊原 幹治

1. はじめに

西南学院高等学校が男女共学に移行したのが1994（平成6）年なので、ちょうど20年になる。この時代を歩んだ者の感覚では、もう20年も経ったのかという感じである。それから2年後の1996（平成8）年には中学の共学化に加え中高一貫となり、2003（平成15）年には百道浜校地へ移転が行われた。また、2010（平成22）年には隣に小学校が開設され、2014（平成26）年度はそこから第一期卒業生が進学してきた。このように、この間ずっと共学から始まったレールの上を走り続けてきたので、自分たちの営みをゆっくり振り返るといふ余裕もなかった。そういう意味で今回の発題は、この20年を総括する良い機会となった。

2. 中学校・高等学校一貫教育の試みと挫折

(1) 新制中学校のスタート

1947（昭和22）年3月31日に「教育基本法」と「学校教育法」が同時に公布施行され、翌4月1日に6・3・3制とともに新制の西南学院中学校がスタートした。この時、西南学院中学校（以下、「西南中」）には優秀な生徒が多く集まった。それは、戦争によって失われた多くの人的資源の欠損を埋め、戦後の復興に役立てることが急務であったと共に、福岡市中心部が福岡大空襲で大きな被害にあったため、被害が軽微であった本校に受験生が集まったからである。戦後の耐乏生活の中で、私立中学校に子弟を通わせることは経済的に大きな負担であったにもかかわらず、562名もの志願者があり162名が合格した。

校長は伊藤俊男、教頭は村上寅次であったが、9月に西南学院専門学校教授伊藤祐之が新たな校長として広島より迎えられた。1年生は入学試験で合格した優秀な生徒たちで構成され、2・3年生は旧制（中学部）の生徒が横滑りしていた。当時は移行期で新制と旧制がこのように入り混じっていた。

新校長の伊藤祐之は、優秀な生徒が入学した西南中を「昭和の松下村塾」「第二の札幌農学校」にして、彼らを日本再建のリーダーに育てたいとの高い抱負を抱き、旧

制高校の教育に宗教教育をプラスしたものを理想とした。

翌1948（昭和23）年4月には新制高校が発足して西南学院高等学校（以下、「西南高」）となり、校長は伊藤俊男、教頭は清水政則¹でスタートした。（中・高ともに校長が伊藤姓である）

（2）中高一貫と校長の交代

この時の西南中は、伊藤校長²以下全教員がクリスチャンで、戦前の教育への反省と理想に燃えて、「日本一の中学校に」という抱負を持って学校づくりを行っていた。やがて、中学ではこれら生徒の高校進学が近づくにしたがって、西南高においてもこの教育の継続を希望した。というのは、公立中学校は学費が不要であることに加え、設備などの教育環境の改善が徐々に進み、最初3.5倍あった西南中の競争率はその後2.5倍、0.86倍にまで減少しており、何か対策を講じる必要に迫られていたのである。そこで、学校側は保護者に西南高への進学を働きかけ、それに応じる形で保護者側は高校の進学体制の改善を要求した。



職員夏期修養会での講話（2014.8.26）

- 1 教頭の清水政則は修猷館を定年で辞めたベテランの先生で、当時公立を退職した教員が来るが多かった。清水が定年で退職になった後に教頭になったのが、広島から招かれた坪井正之である。その後、中高教頭に村上寅次が就任したが、それに伴い坪井は宗教・進学主任となる。
- 2 伊藤祐之校長に関しては『西南学院七十年史』下巻「西南学院中学校」の項目（195頁および200頁）を参照

1950（昭和25）年4月、第1期生の高校進学に伴い、3名の中学教員がクラス担任として高校へ移籍した。学院理事会（理事長・杉本勝次）は9月、高校の伊藤俊男校長をアメリカに留学させ、W.M.ギャロット院長が校長代理となった。翌1951（昭和26）年4月に中高一貫をめざす新体制がスタートした。九州大学名誉教授大平得三³が中高兼任校長となり、同じく中学校の副校長に伊藤祐之、教頭は村上寅次が就任し、職員室も高校職員室に移転した。志賀島で一泊修養会が開かれるなど一貫体制づくりがすすめられた。しかし、高校側はこの理事会の対応に強く反発し、特に両伊藤校長に対する人事を学校運営の非民主化と批判し、「英才教育反対」などと非協力的な態度をとった。中学主導ですすむこれらの「改革」は、高校側から見れば、自分たちの校長は留学していなくなり、職員室も「乗っ取られた」と感じたようだ。

このような反発によって一貫の実はあがらず、伊藤祐之副校長と村上寅次教頭は中学だけの副校長、教頭にとどまり、両者の間に立って「ハリのむしろに座って苦しんだ」村上教頭が10月に辞任・辞職した。これが最初の犠牲者となった。（翌年4月に村上は西南学院大学短期大学部講師に復帰）

また大学1号館の完成に伴って、中学校が4月に旧高等学部校舎に移転したことで、名実共に高等学校から分離され、両校の分離は促進された。

また、旧制から横滑りした生徒たち（2・3年生）が中学在学時に、1年生に比べ図書館利用などで差別待遇を受けたとして、高校入学後に授業ボイコット（5日間）を行い、この背後に高校教員がいるとされるなど、内部の足並みは乱れバラバラの状態であった。

(3) 「七人の侍事件」

1952（昭和27）年9月、伊藤副校長は中学職員会議で「一貫教育の希望を見いだし得ないこと」を表明、12月の職員会議で「中高一貫」を断念した。こうして、1953（昭和28）年3月20日、1947年度入学生卒業式後、E.L.コーブランド院長より7名の教員が解雇通知を申し渡された（「七人の侍事件」）⁴。解雇者の内訳をみると6名が高校所属で、特に学院に対して非協力的とされた者以外の者も含まれていた。これらの処分は大平得三校長の強い意志で決定され、理事会が承認した。

この処分の背景には、西南中より肝入りで入学した「47年度入学生」が、結果的に

3 大平得三校長に関しては『西南学院七十年史』下巻「西南学院高等学校」の項目（300～301頁）を参照

4 「七人の侍事件」とは、解雇されたのが7名であるところから、東宝映画「七人の侍」（黒澤明監督、1954年4月封切り）から取られた。

3名しか九州大学に合格しなかったことにより、保護者からの強い不満が寄せられていたこともあった。では、理事会はこれだけの処分を出しながら、なぜ中高一貫を推進しなかったのか。それはこれら内部の問題に加えて、周囲の公立中学校の教育環境の改善がすすみ、私立である西南中に優秀な生徒が集まらなくなったという事情があった。そして、これらの中心にいた伊藤祐之中学副校長も、1953（昭和28）年4月に広島女学院高校に転任となり、54年4月に同校長に就任した。



中・高教員の解雇の件を報じた『西南新聞』（1953.4.10）の記事

(4) まとめ

この事件は、戦後の学制改革を背景にして起こった事件で、西南中と西南高相互の理解と協力がないと一貫は困難であることを示している。特に、高校は西南学院発足の学校であるというプライド意識もあり、できたばかりの中学主導で「改革」が進められたことに反発したと思われる。さらに、これを主導した理事会の見通しの甘さや説明不足などが混乱を招いたと考えられる。また、進学をめぐる問題はいつの時代も避けては通れない大きな問題である。

よくいわれる組合の設立（1960.12）は、この事件とは直接的には関係がない。組合の設立は7年後に学院主導でなされた。ただ教員の中には、このような悲劇を繰り返さないために組合は必要との認識が深まったようである⁵。

5 当時組合はなかったと証言がある一方で、村上寅次は1947年の「2・1ゼネスト」の際に、組合で参加反対の意見を述べたと語っているが、それがどのような「組合」であったのか詳細は不明である。

この事件は、戦後再スタートを切った西南学院では「七人の侍事件」として語られてきたが、学院にとっては「汚点」であり⁶、中高が一貫を模索した時代があったことすら忘れ去られた。それ故、これだけの犠牲者を出した事件であるにもかかわらず、44年後に実現する中高一貫に経験として生かされることはなかった。

3. 高等学校、男女共学へ移行（1994.4）

（1）共学化以前

これら一連の改革の契機となったのは「高校の共学化」であり、これがスタートであった。流れるものは同じでも、外側から見ると限り現在では「別の学校」である。

共学化以前の高校にとって、毎年4月は新たな入学生を迎える喜びの時であったが、同時に憂鬱な時でもあった。それは、入学生のほとんどが「御三家」（福岡・筑紫丘・修猷館）と呼ばれた公立高校受験に失敗して、傷ついたプライドをもって入ってきたからである。彼らは15歳で選別され、人生最初の挫折を経験した生徒たちで、これら下をうつむき暗い表情をして入ってきた生徒を励まし、新たな気持ちに転換させ、3年間の高校生活をどのように導くかという大きな問題があった。しかし、それは言うに易く困難なことであった。私自身も隣の修猷館高校に落ちて西南高に入学してきたが、挫折感は卒業するまで消えなかったし、授業に対する意欲も低かった。長い間、こういう時代があったことを忘れていた。

私が校長になって間もない頃であった。岡山県のある私立高校から数名の先生の訪問があった。何とかして自分たちの学校を変えたいと思うが、どうしていいのかわからない。何かヒントをもらえるのではないかと考えて、西南を訪ねたということであった。その説明の中に、これと同じ話があって、その時、本校にもそういう時代があったことが懐かしく脳裏に蘇ってきた。

さて、私は2年の非常勤講師の後、1975（昭和50）年に専任教諭として採用された。基本的には以前の状態と変わらず、一体いつまでこういう日々が続くのであろうかと、将来に対して展望が持てず、他の学校に移っていく同僚を見送ったこともあった。授業も緊張感に欠け、まるで「モグラたたき」の状態で、こちらを起こしたら、次の瞬間にはあちらが寝ていると言った具合で、大きな声を張り上げ教室の中を忙しく動き回り、一日が終わると疲れてぐったりの毎日であった。単位や出席時間数不足で原級退学する生徒もいて生徒指導も大変だった。部活の加入率も低く、放課後の職員室は

6 当時事務局局長であった中村保三（52.4～72.3）は、この間の大平校長の苦悩をそばで見っていたという。

活気がなく閑散としていた。進学状況は、特別クラスからは国公立と関東関西の難関私大に一部合格が期待されたが、その他のクラスは文系であれば西南大の推薦⁷がもらえれば上出来で、あとはみな一浪覚悟で現役合格はおぼつかなかった。特に理系の普通クラスは浪人率が80%を超えていた。元気なのは特別クラス担当と、部活に専念している先生たちだけであった。どうにかしてこういう状態を打開したいと思っても、どうしたらいいのかわからず、先輩の先生方はこんなものだと取りつく島もなかった。

さて、高等学校の共学移行の特徴は、理事会が主導したのではなく、高校の職員会議での決定に基づくものであった。経営に直接かかわる問題なので、最終的には当然理事会が決断したが、下からの積み上げ方式で行ったことは稀有な例であると思われる。

また、これが生徒減対策としてではなく（当時はまだそれほど深刻ではなかった）、「女性の社会進出」によって、短大から4年制大学への進学が増加してきたことが背景になっており、建学の精神のさらなる発展と具体化を目指したものであった。創立時に「男子校」としてスタートしたことは時代的制約であり、もし現在ならば「共学校」であったのではないかと考えたのであった。

当時、関東や関西だけでなく熊本の九州学院などのように、地方においても共学のうねりは既に始まっており、本校の動きは全国的には遅れての取り掛かりであった。ただし、福岡市においては、そのような共学化の動きはなく、私立高校が男子校・女子高と棲み分けがなされ、本校の共学化はその流れに先鞭をつけた形となった。特に、この時点から20年近くが経過して、近隣の男子校2校が共学に転換したことを考えると、本校の決断は地域社会から高く評価された結果となった。

(2) 共学化への動き ― 男女共学委員会発足

記録によると、西南高の男女共学への歩みは1975（昭和50）年の教育懇談会が最初であったが、委員長の職権で委員会は一度も開催されなかった。その後、しばらくの中断の後、1988（昭和63）年の教育懇談会で2回、職員会議では4回、「共学」問題が他のテーマと一緒に取り上げられた。翌年も職員会議で2回取り上げられた。ただ、これらは複数のテーマが網羅的に取り上げられたに過ぎず、分団でその中から自由に話し合うといった程度のものであった。この時期、別のグループからは「中高一貫」に関する意見書が提出されていたが、受験生のレベル低下や入学者減による財政上の問題が指摘されており、実現の見通しは立っていなかった。

7 当時、高校の成績が上位2分の1以上であれば推薦が受けられた。

そういう状況の中で、1992（平成4）年4月6日（月）の職員会議で、「男女共学委員会」設置の件が承認された。委員会のメンバーは推進派で構成されていたことがこれまでとは違っており、内海敬三、牧瀬博之（宗教主任）、伊原幹治、小川卓、山口裕史の5名で、これに教頭真鍋良則が加わった。委員長には、年長の内海が間もなく定年退職であり、牧瀬は宗教主任であることから、伊原が推された。ただ、この委員会の目的は共学移行に必要な調査をして職員会議に報告するものであり、最終的な判断は職員会議で行うことになっていた。

委員会は早速活動を開始し、1学期中間考査を利用して、最近、共学に踏み切った関東・関西地方の私立高校を調査した。また、この年度の教育懇談会で2回、教育研究会で1回、職員会議で2回、この件が取り上げられ、これらの会議で出された共学移行への反対意見への反論をまとめるためにクラブ活動などの調査を行った。8月末には、前年に共学に移行した明治学院高等学校（東京都港区）の津田一路校長を招いて一泊職員修養会でその取り組みを学んだ。また、西南中では組合夏期研修会に小川・伊原が参加し、前年に共学に移行した九州学院から内村公春先生を招いて勉強会が開かれた。

〔3〕『男女共学移行調査報告書－共学が学校を変える－』

1992（平成4）年10月16日付で、『男女共学移行調査報告書－共学が学校を変える－』（B5判41頁）が職員会議に提出された。目次は、以下の通りである。

- [1] 建学の理念としての男女共学
 - 1. 寄附行為から見た男女共学
 - 2. 男子教育の総括
 - 3. 建学の精神と男女共学
- [2] 女性の社会進出に伴う男女共学
 - 1. 女性の大学進学率の向上
 - 2. 「良妻賢母」を超えて
- [3] 急減期対策としての男女共学
 - 1. 急減期の経営
 - 2. 「冬の時代」の到来
 - 3. 現状維持の困難性

- [4] 女子生徒にとって魅力ある西南学院
 - 1. 女子入学による可能性
 - 2. 西南学院大学の魅力の活用
 - 3. 現役合格向上の期待
 - [5] 特色ある学校づくりによる経営の安定化
 - 1. 社会にアピールできる特色
 - 2. 授業料を値上げできる高度な教育
 - [6] 男女共学による教育効果
 - 1. 共学に移行した学校の進学状況
 - 2. 女子の大学進学状況
 - 3. 共学のクラブ活動が学校を変える
 - 4. 宗教行事（活動）の活性化
 - [7] 男女共学への移行調査
 - 1. 九州学院高校
 - 2. 立命館高校
 - 3. 同志社高校
 - 4. 関東学院高校
 - 5. 青山学院高校
 - 6. 明治学院高校
 - [8] 男女共学の検討課題
 - 1. 施設関係 — 女子トイレ、更衣室、家庭科教室
 - 2. 入試について — 志願者の変化、男女比率など
 - 3. 生徒数 — 男女比率など
 - 4. 授業 — 分割授業、行事、クラブ活動
 - 5. 進路指導
 - 6. 学校運営
 - 7. 制服
 - 8. パンフレット作成
 - 9. 共学発足（1994.4 新1年生より）
 - 10. 展望
- (付) 男女共学について高校での審議過程

(4) 共学化決定

10月に前記『移行調査報告書』が提出されると、男女共学に関する議論が本格的に始まった。特に体育科はクラブ活動の面から、加入する男子生徒が減ることを心配した。他に、男子校としての伝統や、女子への指導上の困難や期待通り成績のレベルが上がるのかなどの不安、また、共学以外の手段による進路指導の充実や、西南中との一貫案などが出された。ただ、誰の心にも経験したことがないことに踏み切ることへの不安があったと思われる。

11月9日（月）の教育研究会では、先の報告書に基づいて議論がすすめられた。こういう中で、27日（金）の臨時職員会議に共学委員会から提出された資料には、「共学化とその展望」として、

1. 高校の共学化
2. 中学の共学化
3. 中・高一貫（共学）教育体制の実現
4. 新校舎の百道浜校地への移転と建設
5. 西南学院の教学の全体像の明確化、が述べられている。

ここには、共学化によって西南学院全体が、これを契機に大きく飛躍するという展望が語られていた。20年後の2013（平成25）年の時点で、ここに書かれたすべてが実現し、触れられていなかったのは小学校開設だけであった。そういう意味で、この展望は「共学」が持つインパクトの大きさを的確にとらえていた。

この時期、会議のみならず、教員が集まるところでは、常に「共学の件」が話題となった。また、職員会議では採決に当たって過半数か、それとも3分の2以上の賛成を必要とするかで議論となったが、経営にかかわる判断であるとして、投票は行うものの最終判断は理事会に委ねることで落ち着いた。11月には田中輝雄院長に現状報告を行った。12月2日付で、改訂版『男女共学移行調査報告書－共学が学校を変える－』（B5判42頁）が職員会議に提出された。16日には中村保三理事長からは、常任理事会としては過半数の賛成で判断するとの意向が示され、17日に常任理事会でこの件が報告された。

こうして年が明け、1月から2月の入試業務が一段落して、この件に特化した臨時職員会議が1993（平成5）年2月22日（月）、26日（金）、3月1日（月）と、3回連続して行われた。最後は期末考査第1日目終了後の13時30分から17時35分まで行われた。最後の議論の後に無記名による投票の結果、共学化移行に賛成33、反対16の3分の2の賛成が得られた。こうして、3月4日（木）の常任理事会、3月12日（金）の総員理事会で、「1994年度からの高校の共学化移行」が正式に承認されたのであった。

3月16日（火）の職員会議には事務職員も出席して、その冒頭で、久保俊夫校長から「理事会で1994（平成6）年度より共学移行決定」が報告され、「新しい学校建設のために一致協力してほしい」との発言があった。

3月23日（火）、3学期修業式後に開かれた職員会議では、共学化移行計画が審議され、1. 役割分担、2. 女子トイレの新設、3. 入試における男女比率、4. 制服、などの件が議題になった。いったん正式に決まると、一致団結して事に当たることができるのが西南高の良さである。それまでのわだかまりを捨てて協力態勢が構築された。

(5) 共学化移行発表と準備

1993（平成5）年4月14日夕刊各紙に、本校の「共学化移行」が発表されると反響は大きく、4月20日の読売新聞朝刊は、「伝統改め男女共学」「論議10数年に決着」「来年度から『世の流れです』」との見出しで、高等学校が1994（平成6）年度から男女共学に転換する記事を学校の写真付きで掲載した。「もともと学則には『男子校』とは明記されていないため、県の許認可は不要で、学校側は早速、中学校に文書を配布、PRを始める予定で、更衣室やトイレなどの設備改造にも近くとりかかる。」とある。さらに、「久保俊夫校長は『男性中心の価値観で動いてきた社会が変わろうとする今、男子だけで思春期を送り、男性社会の価値観を生み出すような教育環境が妥当か、問い直した結果です。総じて歓迎ムードの在校生に対し、卒業生の間には批判的意見もあるようだが、今後の教育のあり方を考え、理解して欲しい』という。」とのコメントが続いている。他にも新聞各紙が同様の記事を掲載した。

テレビ局もNHKをはじめ民放各社が取り上げ、お茶の間にローカルで流してくれたので宣伝の必要はなかった。

また、「制服委員会」が発足した。制服に関しては、事前の調査で女子生徒の募集に大きな影響を与えることが判明しており、これまでの詰襟の上着に黒ズボンの学生服から、従来のイメージを大きく転換したのである。東京の服飾メーカー「JUN」が初めて手掛けたアイビー調のオリジナルで、冬服は男女ともスクールカラーの緑を基調にしたブレザーにグレンチェックのズボンとスカート（女子はキュロットタイプもあった）。シャツは、オレンジ（現在は廃止）、緑、白、黄色の4色があり、自由に選ぶことができる。これにネクタイとリボンが付属する。カットソー（現在は廃止）も選べた。夏服は、グレーを基調にしたズボンとスカートである。この制服は評判になり他校にも大きな影響を与えた。また、学校案内の作成や女子用トイレなど設備の改修に加えて、女性専任教員2名が採用された。このほか、熊本の九州学院、大阪の清教学園、京都の立命館、同志社、東京の明治学院、青山学院、県立新宮高校などを調

査訪問し、またそれらに加えてアンケートによる調査結果が職員会議に報告された。

9月22～23日に開催された文化祭のテーマは「LAST BEAT-さらば男子校-」で、プログラム最終のグラウンドで行われた恒例のフォークダンスも、これが最後となった。10月15日の教育研究会には、九州学院の教務主任の井波晃先生を迎えて研修し、共学化移行に備えた。

また、1学期に続いて2学期にも中間考査期間中に中学校及び塾訪問を行った。10月20日から25日に行われた私学中高展では非常に大きな反響を呼んだ。1年生に郊外宿泊オリエンテーション（住吉浜リゾートパーク、大分県杵築市）を、2年生の林間学校（長野県軽井沢恵みシャレー、野辺山帝産ロッジ）を共学実施に合わせて行うことが決定した。このような流れを受けて、1994（平成6）年1月に久保校長を中心に、中高一貫教育委員会が発足した。

（6）共学発足（1994）

ア．“西南ショック”の波紋

1994（平成6）年2月1日付の西日本新聞には、「高校関係者に“西南ショック”広がる」「受験地図激変 公立にも影響必至」などとの見出しで、「今春、男子校から共学に転換する西南学院高校（福岡市早良区）が志願者を2,794人（前年度1,451人）と一気に倍増させ、受験生を奪われた形となった他の私立や、公立の高校関係者の間に“西南ショック”が広がっている。」「女子受験生の中には『西南を第一志望にし、公立を滑り止めにする』といった従来の受験パターンとは全く逆の動きも出ており、公立の受験戦線にも影響を与えそうな情勢だ。」とある。『『予想していた範囲では最悪のものになった』と頭を抱えるのは、西南と競合関係にある筑紫女学園（同市中央区）の古野久光教頭。昨年の1,554人から約400人減の1,167人となり、もろに影響を受けた。』記事は「同じく、福岡雙葉も」と続く。「各校とも、校長を先頭に福岡市内の中学校回りをし、受験を呼びかけていただけにショックが大きく、雙葉は、4日の入試後に再募集を決めた。」とある。本校には、これまでにない多くの志願者が集まったために、2月4日（金）の入試では、高校の他に、中学、大学にまで試験会場が分散する結果となった。

1994（平成6）年度入学の共学第1期生の人数は、441名（男子296名、女子145名）、9クラスでスタート。「制服おニュー 華やぐムード」との見出しで、4月7日に西南学院大学チャペルで入学式が行われ、久保俊夫校長が「男性と女性が自立した対等の関係で協力し合いながら、いろんな価値観に触れ、自分の目標を目指してください」と式辞をおこなったとの新聞報道。写真には「男女共学になって初めての入学式。校門前で記念撮影をする新入生たち＝福岡市早良区の西南学院高で、7日午前8時半

すぎ」との記事。

また、生徒名簿も混合名簿が採用された。これは本校の人権教育に関する取り組みの成果で、当時としては画期的であった。チャペルの座席も男女が隣り合わせに座ることになった。

イ. 影響と相次ぐ共学化

本校の共学化の影響は私立だけではなく、公立でも同様であった。それまでこの学区では、修猷館の次のランクの学校として本校と競い合っていた城南高校が、本校の共学化に危機感を抱き、1995（平成7）年度より「ドリカムプラン」を実施した。「キャリア教育の先駆け」として、NHK テレビでその取り組みが全国放送されたほどの熱の入れようであった。これは、1年生の段階から「将来どのような職業に就きたいのか」の動機づけを明確にすることで、国公立大学への合格を推し進めようとするもので、県下から教員を集め、鳴り物入りで実施された本校への対抗策であった。

また、市内の私立高校でも一貫と共学化が相次いだ。男子校であった福岡大学付属大濠高校も1996（平成8）年度より中学校（80名）を開校し中高一貫となり、この後共学に移行した。また、カトリック系の泰星中学高校は上智大学の系列校になり、2011（平成23）年に「上智福岡」と名称変更し、共学へ移行した。

4. 中学校の共学化と、中高一貫教育の実施

(1) 中学校の共学化

従来、西南中の卒業生の多くは、県内外の有名私立高校や修猷館をはじめとする県立高校へ進学し、一部が西南高へ推薦で、あるいは県立高校受験に落ちて入学するのが一般的であった。ところが、共学によって高校のレベルが向上したことで、中高のレベルが平均化し、「中高一貫」の枠組みが整ったのである。

毎日新聞1995（平成7）年4月7日付の朝刊は、そのあたりの事情を次のように説明している。



例年とは違う華やいだ雰囲気西南学院高校の入学式（毎日新聞1994.4.7）

「受験生増加で優秀な女子獲得」との見出しで、「成績上位30人のうち男子は4、5人。男子のレベルは上がっているのに、それ以上の女子が集まった。第一志望で入学してくる子が増えて、生徒の表情も明るくなった。約80年に及ぶ男子校の伝統を破って、昨年から共学に踏み切った西南学院高（福岡市）の久保俊夫校長は、共学化の成果に胸を張る。共学初年度は、受験者が前年の約1,450人から一挙に2,800人と倍増。従来は私立女子高や公立の進学校に進んでいた成績上位の女子生徒が集申し、福岡地区の受験地図を一気に塗り替えた。これまで、併設^(ママ)の西南中から同高に進む生徒は、例年200人前後の卒業生の1/3にも満たず、一昨年はわずか33人。残りは県内外の有名私立高や市内の公立進学校に流れていた。それが昨春は77人、今春は85人と増え、共学の人気を数字で実証した。」ちなみに、この時の西南中からの推薦枠は在校生の95%の範囲であった。

このような状況の中、4月3日に田中輝雄院長が記者会見し、1996（平成8）年度から西南中を共学化し、なおかつ西南高との一貫教育に移行することを明らかにした。翌4月4日の新聞には、「西南中も共学化、96年度から『中高一貫効果』期待」（毎日新聞朝刊）と報じられた。

こうして、10月21日の西南学院大学ランキン・チャペルで行われた中学入試説明会には、過去の2倍以上の約1,300人が詰め掛けたと、その盛況ぶりが写真入りで西日本新聞に掲載された。

同時に制服も発表され、男女共スクールカラーのグリーンを基調にしたもので、女子生徒はセーラー服にスカート、胸にリボンがあしらわれたものである。

共学・一貫になる西南中の入試は1996（平成8）年1月29日に行われ、定員200人に過去最高の1,998人が志願した。うち、841人は女子で、昨年の志願者数（1,196人）に女子がそのまま加わった格好となり、「福岡の“私学受験図”を塗り替える台風の目」となった。

「中高一貫 熱い人気 6年安心 大学の門にも近く」（西日本新聞1996.1.26）との見出しで、新設の大濠中と共に競争率10倍前後と、福岡地区の私立中入試としては過去例のない高い競争率を記録し注目を浴びた。これに対し、女子校は苦戦し、筑紫女学園中5%、福岡雙葉中7%と増加したものの、福岡女学院中、中村学園女子中が10～20%減となった。

以下は、毎日新聞に載った村坂政利中学校長のコメントである。

「女子は共学志向が強いことや、中高一貫教育でわが子の受験の負担を減らそうという保護者の親心がある。学校としても高校受験で中断せずカリキュラムがこなせ、中高一貫制は私学の流れになってきている」と分析している。

(2) 中・高の組織一元化 (1999)

ア. 変わったものと変わらないもの

これら中高の一連の改革で、高校はずっと悩まされ続けてきた大きな問題から解放された。それは、修猷館など「御三家」と呼ばれた学校を落ちて暗い顔をして入学してくる生徒への対応の問題である。自分の居場所は「ここにはない」との気持ちを切り替えられないままで3年間を過ごす生徒が大勢いたのである。さらに修猷館の場合、悪いことに学校が隣接していたことが、これに拍車をかけた。

男子校時代の卒業生の話に今でも登場するのが、この話題である。市内電車で修猷館の生徒と一緒に西新町で降り、そこから二手に分かれて、それぞれの学校に向かう。修猷館は西新の「表通り」にあり、西南はその「裏」にある。特に修猷館の女子生徒のセーラー服の六光星のマークは、思春期の男子には屈辱感を与えたようだ。また、夏期補習の際には、西校舎からちょうど修猷館のプールが垣間見えた。水しぶきの音の中に女子生徒の声が混じって聞こえてくる。冷房などなかった当時、補習に集中できないのは当然であった。加えて、あのSWの帽子。誇りを持ってと言われても、志望校に入れなかった無念さがある以上、それは無理な話であった。かなりの生徒が、校門が近づいてから、かばんの中からペションこにつぶされた帽子を取り出して被ったのであった。

それが共学によって一挙に変わった。中学からの一貫生が半分の200名、それに専願生50名は第一希望である。前期入試は以前と同じで「御三家」に落ちた生徒が主流であるが、落ちたとしても、そのショックは以前に比べると小さなものになっている。後期入試では、本来であれば本校を受験したかったが、前期で敬遠した生徒たちであるので、そのショックははるかに小さく、学校全体が明るくなったのである。

卒業生から、西南は変わったのではないかと聞かれる。確かに、共学となり一貫となり、校舎も百道浜に新しく建設された。外側から見る限り別の学校である。しかし、内側に流れているもの、それは建学の精神であるが、これは西南学院全体を貫いているものであり、これは何も変わっていない。否、私たちはこれをさらに発展させようとしている。今度は、卒業生たちが、この「新しい皮袋」に自分の子どもを入れたいと思う学校になるようにと頑張っている。

イ. 大学進学率の向上

高校の男子校時代、九州大学に現役合格ゼロという年度があったが、少しずつ向上して浪人を含めて20~30名で推移していた。ところが、共学一貫を機に難関大学への合格者が増加し、2009(平成21)年度は、東大(3)、京大(4)、九大(57)、早慶上智(98)であった。

ウ．部活の活性化

一貫になって高校受験から解放された中学生たちは、部活に専念できるようになり、95%の生徒たちがそれぞれ部活動を行っている。高校でも、部活の加入率が高く、全国大会に出場するなど「二兎を追う」生徒が増えている。最近では、同窓会からの援助も行われている。

5. キリスト教一貫教育の完成と課題

(1) キリスト教ブランドの向上

西南高には西南学院大学への推薦制度が古くからあるが、これまでは大学に対しては、高校からは入れてもらうというような力関係にあった。もう少し枠を広げて欲しいと思っていた時には、その要求は満たされず逆に枠は狭められる傾向にあった。それが、「共学一貫」によって立場が入れ替わったのである。推薦制度の希望者が96名（1994年度）から 60名（2014年度）と減少した数字が示すように、今度は大学が高校に推薦入学者を増やして欲しいという立場に変わったのである。また、小学校からの推薦受け入れも2014（平成26）年度から行われ（58名）、小学校から大学までのキリスト教教育の流れが出来上がった。こうして今や、西南学院中高は学院のキリスト教一貫教育の中核となった。ただ、真ん中にあるというだけでなく、学院全体のブランドイメージを高めることに貢献している。

(2) 理事会の強化と問題点

この後、この地域で競合関係にある学校が相次いで共学化に踏み切ったことを考えると、1994（平成6）年に本校が共学化しなくても、いずれはこのような状態になっていたかも知れない。しかし、それではこの20年間の充実は全く別のものになっていたであろうし、現在私たちが得ている成果もなかったであろう。

さらに、もし遅れて共学化を行っていたら、それは理事会主導の形をとっていた可能性もあり、もしそうなら、それは学院の歴史の闇の中に葬られた「七人の侍事件」の再現となったことも考えられる。そうであれば、理事会は理事会主導という形に躊躇して時を失し、本校は他校に遅れをとった可能性が濃厚である。

では、高校ではなく中学校が率先して行った可能性はないのか。それは全くあり得ない。その頃、中学の一部の教員が考えていたのは、生徒の自主性に全てをゆだね、定期試験も校則もないフリースクールのような学校であり、それは理事会の承認はおろか、学院全体の支持を得られるようなものではなかったからである。また、1950年

代後半から60年代にかけて、再び優秀な生徒が中学校に集まるようになって、その生徒たちを西南高に送り出そうという動きはおこらなかった。

結果的に、40年前に反対した高校によって共学が進められたのであった。

こうして学院理事会は、最小のエネルギーで最大の果実を得たと言える。他校の場合は、現場の反対を押し切る形で理事会が決定しているが、それは、ほとんどの学校が大学付属であることによる。

話を元に戻すと、このような経営を大きく左右するような決定を、高校の職員会議が行い、結果的にうまくいったが、それはそれで問題があると言わねばならない。

(3) 中高への社会的評価

共学以来、西南中高の社会的評価が上り、卒業生から様々な意見が寄せられた。

- 西南の卒業生だという驚かれ、相手の接し方に変化が現れる。自分たちの時代は評価が低かったのでうれしい。だから、自分の娘や息子を是非入れたい。
- 関東在住の卒業生であるが春から転勤になるので、お盆休みの帰省中に娘に母校を見せたい。
- はじめの頃は、どうして自分たちのときに共学にしてくれなかったのかと恨み言を聞かされた。初期は、単純に女子と一緒に良かったということであったが、後には、自分もこんな良い学校で学びたかったとの思いが募って来た。
- 保護者の評価も高く、子どもが西南に行っているということが誇りになっていて、子どもの満足度も高く、学校への信頼感是非常に高い。「母の会」など保護者の活動も盛んである。

それから、教員を対象にした講演会が終わって、私が講師の先生から校長室でうかがった話である。自分の娘は信州大医学部に行っている。その娘の友人が西南高出身で、彼女は卒業したら「国境なき医師団」に入りたいという希望を持って医学部に進学したと聞いた。それは在学中にペシャワールで活躍する中村哲医師（西南中卒業）の話の聞いたことがきっかけであるという。立派な学生を育てていると、お褒めいただいた。

(4) 建学の精神を守り育てる

今日、プロテスタントの学校によってつくられたキリスト教学校教育同盟に98法人が参加しているが、最大の問題は経営の安定化をどう図るかという問題であり、さらには「誰がどのような形で建学の精神を担うのか」という問題がある。前者は、生徒数が減少している中で、どうしたら学生・生徒を確保できるかという問題で、特に地

方の私学には深刻な問題である。次は、建学の精神を担えるクリスチヤンの教職員を採用できていないという問題である。西南の場合、かつては宣教師がその中心的な役割を担っており、戦前には大学教員の約1/3が宣教師であったという。これは、人件費の軽減にも大きく寄与していたが、現在の学院にはアメリカ南部バプテスト連盟との関係が切れて「宣教師」は一人もいない。かつて宣教師であった外国人の先生方が近い将来退職する時のことを考えると背筋が寒くなる。時間はあまり残されていないのだ。

では、建学の精神はどうなるのか。今、そういう問題が西南学院を含めて日本中のキリスト教学校で起きている。まず、何と言っても、建学の精神に責任を持ちそれを担うのは寄附行為から言うと理事会であるが、具体的にはクリスチヤン教職員であろう。しかし、ただクリスチヤンであれば誰でもいいというのではないが、クリスチヤンでなければ身に付いていない感覚がある。その上で、それをサポートできる職員の存在なのである。

キリスト教学校がキリスト教学校でなくなれば、やがて社会から見放されるだろう。祈りがなくなったキリスト教学校は長期的に見れば評価は落ちるであろう。社会はキリスト教学校ならではの「何か」を期待しているからである。「塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。」(マタイ5.13)

現在、わが国の教会は新旧両派を問わず、高齢化が進み若者の姿が減少しているだけでなく、教会の数自体が減少している。私たちのバプテストに置いても同様である。こういった教会の力の減退が、クリスチヤンを社会に供給できないという問題として現れており、学校現場でも職場で教職員に伝道しなければならない所まで来ているのである。

何度も言うが、キリスト教学校の問題は、この建学の精神によって、いかに未来を切り開いていけるかにかかっている。たまたまある企画がヒットしたとしても、それが「キリストに忠実」でないならば、創立者の意思に反し、学院全体を元気づけることにならない。反対に、それとは異なった価値観が戦争中のように学院を間違った方向に導くことになるのである。

創立から100年が経過し、私たちが改めて建学の精神とは何かということを思い起こし、それぞれが「中興の祖」になるという意識を持つことが必要なのである。

これは、2014年8月26日(火)に大分・別府湾ロイヤルホテルで行われた職員夏期修養会での講話をもとにして、紀要に掲載するため改めて執筆を依頼した原稿である。